

◆◆◆◆◆なぜ、『御社のチャラ男』か◆◆◆◆◆

読書の習慣がなかったわたしですが、コロナ禍で身動きがとれなかったときに、「買ったはいいいけど、読まずにほったらかしてある本がたくさんあるじゃない！ いま読めばいいじゃない！」と思い立ち、本棚からゴソゴソと本を引っ張り出しては読み耽るようになりました。読書の習慣は、そのようにして自然とついていったのでした。

「おもしろい！ 今までなんで読まなかったんだバカ！」と自分を責めつつ、数々のすばらしい小説に出会ったわたしはやがて「このすばらしい文章を使って演劇をつくれないうのかな」というよくわからない欲望を持ちはじめ、「小説を演劇にする」というざっくりとしたコンセプトを基に、「かみむら文庫」という一人芝居をつくる企画をスタートさせました。

数々のすばらしい小説との出会いのなかに、『御社のチャラ男』はありました。一人称で進んでいくこの小説は、まさに演劇の台本のように、「いつかこの小説を必ず演劇に！」と、心に決めていました。登場人物ひとりひとりにフォーカスしながら進んでいくスタイルは、例えば『マグノリア』のような映画を思い出させ、一人芝居の数珠繋ぎのような構成を思いつきました。

糸山秋子さんの文章は、さらりとしていて、深くて、軽みのなかに重さがあって、わたしは大好きなのですが、小説として書かれたものを、黙読を前提として書かれた文章を、声に出して伝えてみた時、その魅力は失われてしまうものなのではないでしょうか。わかりません。わかりませんがわたしは、わたしたちは演じる者であり、そこにある言葉をつい声に出して読みたくなってしまふのです。ほんとです。

そんなことで、わたしたちは今回、リーディング公演として『御社のチャラ男』を上演します。

この作品は、糸山秋子さんの『御社のチャラ男』という16の章で構成された小説を編集・再構成した朗読劇です。

とはいえ、「いわゆる朗読劇」とも趣が異なるものになっている気がします。俳優がじっと椅子に座って、あるいは直立で本を手に持ちながらいい声で読みあげる、みたいなことにはなっていません。

朗読劇から出発しましたが、稽古を重ね、自然と覚えてしまった台詞に関してはわざわざ台本に目を落とさずとも良い、ということにしました。覚えても覚えなくてもいい。なので、「おや？ いきなり台本みてないですけど！？」みたいなことになっています。「あれ？ がっつり眼を合わせて、しっかりとお芝居なさってますが！？」みたいなことにもなっています。シーンによっては。エピソードのなかでの役割によっては。

糸山さんの文章に刺激されたわたしたちは、今や台本に目を落とすどころか、声や身体や机や椅子や段ボールを、動かしたり、乗ったり、投げたり、積み上げたりしながら、『御社のチャラ男』を演劇化しはじめています。

台本の言葉に忠実であればいい。台本との距離感は各々にお任せしています。均一でなくていい。そういうゴツゴツした感触をもった「過程」の状態を見ていただこうと考えています。

エピソードは日替わりで、5日間に分けて上演していきます。
上演時間の都合もあり、このような形をとらせていただいています。
すみません。

フルでやってしまうと大変なことになってしまうのです。

みんな痩せちゃうんじゃないかと思うんです。

ですので今回は、「過程」を目撃していただきたく、「あ！これちゃんと全部見れたら面白そう！」と予感していただけるよう精進いたします。

ちょっと変わった趣向の上演形態ではありますが、どうぞよろしくおねがいたします。

企画代表・上村 聡